



だてなりクン

みやぎの明治村 とよま資料館だより

登米市歴史資料館・高倉勝子美術館
発行/株式会社とよま振興公社
〒987-0702
宮城県登米市登米町寺池桜小路2-1
Tel: 0220-52-5566
Fax: 0220-52-2630
HP hypp//toyoma.co.jp



発行日 令和8年10月1日

登米市高倉勝子美術館「桜小路」編

第21号



図1:高倉勝子氏
高倉勝子画集
「悠・祈り・いのち・風・流・大地-」より

図1は平成7年(1995)11月に発行した高倉勝子画集「悠・祈り・いのち・風・流・大地-」の巻末の「画室の窓辺にて」から転載した高倉勝子氏の写真です。

その後、画集その二が平成16年(2004)2月に出版されています。巻末に「ふるさとに寄せる思いはいろいろあるが、特に高齢になると、とつくの昔、故人となった私の祖父や祖母、そして父、母にたいするなつかしくかない思い出が次から次と浮かんでくる。

北上川の登米町にかかる橋を「来神橋」といったり源義家の征夷大將軍としてこの地にきた時の伝説とか、源義経が兄、源頼朝に追われて鎌倉から、はるばる平泉へ落ちて行く時の悲しい伝説など数限りなくある城下町でもある登米町は私のふるさと。子や子孫に語り伝え

ておかなければと切々と、この頃、思うようになった。手足の動くかぎり一生懸命、これしかない私に与えられた仕事に全力を傾けて描きつづけるばかりである。」と記述しています。



図2:屏風「保呂羽館に想う」(H13制作)一部改変
所蔵:登米市教育委員会

図2は平成13年(2001)に制作された「保呂羽館に想う」という水墨画です。

この絵の説明書きに「東北地方の地図をさり気なく見ていたら、奥羽山脈(奥羽本線)齒黒神社、出羽三山、羽後、羽前国、羽越線ありとあらゆるところに「羽」の名が出てくる。郷土に有りながら、その意味をわかろうともしない自分の愚かさを恥じた。その他いたるところに出てくる「羽」は、大和朝廷に弓矢の武器の大事な要素であり「鷹の羽」「白羽の矢」が立ったなどにも

使われ、又この大切な羽を持つ鳥「鷹」の生息する森林も守ろうとする、「森林保護法」も大宝律令、日本書紀など

にも記載されている。我が故郷の八幡様境内や日根牛の神社にも、志津川あたりにもこの石の碑文が見られるのは不思議である。

画集のあとがきの「ふりかえって……」に、「農を業とする家に生まれ育った長女の私は、祖父母、父母、妹二人、一人息子の弟と八人家族の中で、とても大事に育てられました。

祖父から、出雲風土記、出羽、肥後、播磨の各地の風土記類、更に古事記、日本書紀、中国の十八史略、史記、礼記等々、数えきれない程の書物を県立高等女学校の生徒の時祖父の部屋で教授されるのが日課でした。

父からは、古美術の鑑賞法、刀剣の古、新、良否の鑑定と作法、馬に関する知識、騎馬民族と馬術、狩猟民族と農耕民族との系譜等々、今にして思えば、もっと真剣に聴いて置くべき事が多くありました。」と書いています。



図3:「原爆の図」(平成17年制作)一部改変
所蔵:登米市教育委員会

図3は平成18年(2006)、85歳の時に描いた「原爆の図」で、今年制作をしてから20周年となります。勝子氏は昭和20年(1945)7月に陸軍将校の軍人と結婚をして、夫の赴任地広島で生活を始めたのが、8月1日だったそうです。その後、同月6日朝午前8時15分、夫を送り出した後に被爆し、爆風に吹き飛ばされ、畑の中で気を失いましたが、一命をとりとめ、自らも傷を負いながら、負傷兵らの世話を命じられ、地獄の惨状を目にしたそうです。

太平洋戦争終戦後、勝子氏は仙台に住み、中学校の美術教師として働きながら、「力強く働く女性」や「健やかな少女」をモチーフとした絵を描き、河北新報社主催の美術展等で受賞を重ねました。

勝子氏のご子息篤磨氏によると、「母は私達兄弟だけでなく、孫や中学校の生徒達にも被爆体験をよく語って聞かせていたが、決して画題にすることはなかった。」その理由を尋ねると「原爆には『美』なんて一つもありません。だから描かない。」ときっぱりと答えたと話しています。平成17年、勝子氏が定期的に被爆者健診を受診していた病院の関係者から、「あなたが描かないで誰が描くの。」と強く促されたことがきっかけとなり、時に泣きながら仕上げ、最初に考えた題は「平和の祈り」だったと篤磨氏は話しています。画題の「平和の祈り」がいつの間にか「原爆の図」に変わりましたが、その理由は篤磨氏もよくわからないと話しています。

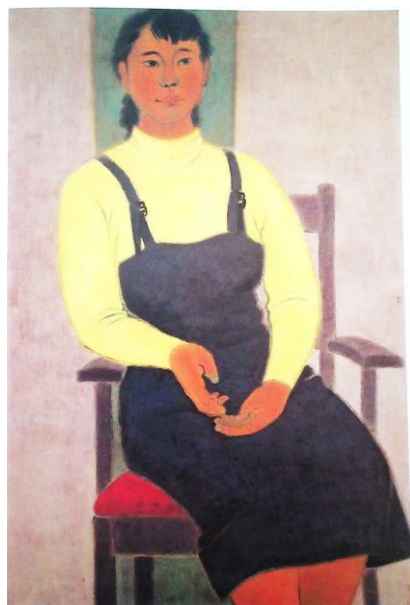


図4:「黄衣」(昭和33年制作)一部改変
所蔵:登米市教育委員会

図4は、昭和33年(1958)の第22回河北美術展に出品した「黄衣」で文部大臣賞を受賞した作品です。河北美術展には過去2度出品していますので、三作目で受賞したことになります。

画集の作品説明文に、「私の家のお手伝いのM子。「モデルになって」とたのんだら、はずかしがったが引受けてくれた。この絵が文部大臣賞になり、新聞社の方が取材に見えた夕方、家族みんなで歓声を上げた。」と書いています。

勝子氏は夫と共に、昭和20年(1945)12月、夫婦の郷里である登米郡登米町(現登米市)に帰郷し、「細々と農事をしながら将来の生き方を模索する日々が続いた。」と、画集の「高倉勝子年譜」に書いています。

また、昭和23年(1948)3月に登米郡登米中学校教諭に就き、同26年(1951)4月刈田郡大鷹沢中学校に転任、翌27年(1952)4月宮城郡利府中学校に転任、この頃に、「原爆症の不安とたたかいながら、子育て、教職と多忙な毎日の中から本気になって写生帖を広げる気分になる。」とも書いています。

昭和58年(1983)、河北美術展顧問に推薦され、平成元年(1989)、宮城県文化功労者として表彰されました。

次号の告知

次号は「春蘭亭編」で、発行予定は来年1月頃を予定しています。

春蘭亭は、登米町内に残されている武家屋敷のうち唯一一般公開をしている建物です。ぜひ足をお運びいただき、当時の武士の生活を偲んでいただきたいと思います。

《 イベント情報 》 高倉勝子美術館 R8.10.03(土)～11.03(火)

特別展「高倉勝子没後10年 白石行脚の図 原画展」
(～松尾芭蕉 奥の細道紀行～)

編集後記

高倉勝子氏の素晴らしい絵は勿論ですが、書も達筆なことに驚かされます。幼少期から書が達筆だったようで、あまりにも達筆だったため、誰かが代筆したのではと疑われた時もあったそうです。

ところで、勝子氏の絵の中で、インパクトのある絵の一つに「原爆の図」をあげることができます。この絵は、勝子氏でなければ描くことのできない情景を表現しています。終戦後81年となりますが、「平和」について、改めて考えていただくきっかけにしてほしいと思います。



“みやぎの明治村”SNS随時更新中です！

LINE “お友達登録” 受付中です！右記はQRコードで

